

---

# パペット (ユキの日々)

U B O B

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パペット（ユキの日々）

### 【Nコード】

N6673H

### 【作者名】

UBOB

### 【あらすじ】

「右手が彼女になる」などという無体な事を俺に強要しようとするハルヒの命を汲んで長門それを実現してしまった……

## 第一節

毎度の事だが、ハルヒは突拍子も無いところでいきなりテンションを上げるといふ実に厄介な性癖の持ち主である事は言うを待たない。今日も今日とて俺がブレザーの内ポケットの財布に手をやって、はて、帰りに新しく出来たラーメン屋を覗いてみた場合の予算は如何ほどか。噂の特大トロトロチャーシュー山盛りラーメンを注文出来るだろうかと実に平々凡々とした一介の男子高校生らしい健全かつ重大な問題を考えあぐねていると、突然俺の右腕を掴むなり、

「あんた、ひよっとしてついに右手に女の子が生えた？」

伊達に長年彼女無し歴を強調してたんじゃなかったのね」

なんぞと意味不明の事を言いながら懐から俺の腕を引っ張り出した。

当然の事ながら俺の腕には女の子も筍も生えちゃいない。まっとう至極な当たり前の手がついているだけだ。

だがハルヒはそれを見るなりあからさまに不機嫌になって

「なんだ、ツマンナイ。せつかく期待したのに。今からでもいいから生やしなさい！」

とんでも無い事を言い始めた。普通の奴がどんな無体を言おうが何てことはないんだが、事、ハルヒについてはとんでもない事を言ったらまんま実現してしまったという思い出したくもない前科・前歴が片手じゃ足りないくらいあるからな。

そういつた訳で俺は思わず腕を引っ込め、何事も起きませんようにと念じつつ密かにじつとりとした冷や汗を流しているとハルヒな更に無茶苦茶を言い始めた。

「ねえ、有希ちゃん。我が団の誇る無口晩生キャラよね。強烈にキヨンに片思いしてキヨンの右手に乗り移りなさいよ」

おい、益々とんでもない事を言い始めるんじゃない。それに、長門、その目は……

ハルヒの冗談を真に受けるんじゃないぞ。

ハルヒの語った所によれば、緑だか紫だかつていう女の子がパペットの人形みたいになって主人公のモテナイ君の生えてしまうというドタバタラブコメアニメを昨夜ネット見つけたらしい。つまり、俺のようなモテナイ男（……って、こら、ハルヒ、勝手に決めるな。たとえ百歩譲って事実であつてもだな、俺というデリケートな人間はそういった事を話題にされたけど心は深く傷つくんだぞ！）にも不思議イベント発生の芽を期待したらしい。いい迷惑だ。落ち着け、ハルヒ。頼むからもうちょっと人の迷惑にならない妄想に留めておいてくれ。

あまりの馬鹿馬鹿しさに俺が頭を抱えていると。ハルヒの話を黒曜石の様な瞳を瞬きもせず黙って聞いていた長門が何も言わずに突然すつと部屋を出て行った。

しばらくして何やら手に持って部屋に戻ってきた長門に尋ねる。

「何だ？ それは？」

「ワタシ」

そう言いながら長門は小さな人形の長門を俺の右手にかぶせるように取り付けた。

「おい、長門。なんか俺の手にぴったりとくっ付いてるんだが、取れるんだよね？」

おっ、右手の長門人形が手をバタバタさせている。

動くのか？」

ネットサーフィンをしていたらしいハルヒは俺の言葉に反応して怪しい物でも見るようにジトツとした目で俺を見つめる。

「なんかさあ、長門がこんなもの俺の手にくっ付けちゃってさ」

「あんだ、えらく嬉しそうね。オタク属性に目覚めたの？」

「いや、これはハルヒがそうしるって言ったからだ。」

お前が変なことを言うから長門がわざわざ人形を持ってきてきたな……」

「それにしても、えらく嬉しそうに人形の手をバタバタさせているじゃないの」

「いや、別にそんな事はしてないぞ」

「ふうん、見せてみなさいよ。なるほど、有希ちゃんにそっくりね。良いこと、これからこれがあんだの彼女……」

そう言いながらハルヒはニタニタしながら人形を突付けていたが、突然真顔になって、何故か不安そうにのたまった。

「あつ、でも、有希ちゃん、ほんとにこれに乗り移ったらだめよ。」

その……あくまでSOS団として、不思議現象のシミュレーションなんだから」

「おい、ハルヒ。俺に彼女を作りたいのか作りたくないのかどつちだ！

つて、まさか俺、当分このままで生活するんじゃないよな？」

「その、まさかよ。」

あんだには可愛い彼女が出来るんだから文句を言う筋合いじゃないでしょ。」

それにこうやって不思議現象を再現していれば、きっと出現場所を捜し求めている本物の超不思議体験が我がSOS団にドバドバ押し寄せてくるに違いないわ！

ああ、待ち遠しい！」

再びテンションをあげやがった。何をいったい訳の分からんトチ狂った理論をまくしたてるんだ。本当になっちまったらどうするんだ。

「あんだの右手に我が団の未来がかかっているといっても決して過言ではないわ！

頑張りなさい、しっかりするのよ」

そう言い放つとハルヒは意気揚々と帰り支度を始めた。

## 第二節

ハルヒが帰った部室で、長門は再び黒曜石のような瞳で俺を見つめながら語り始めた。

「これは学校にある材料で作ったプロトタイプ。

現代の地球の科学技術で再現可能な方法で涼宮ハルヒの要求に答える必要がある。

でなければ涼宮ハルヒは超自然的方法でそれを行おうとする。」

マジで俺の手にお前のミニチュアが生えるってのか？

「そう、私か、あるいは涼宮ハルヒのミニチュアが生える可能性が高い。」

そうなたら現実の修復は不可能。

帰ったら早急にハルヒの要求に答える高機能版に更新すべき」

それじゃ、と、帰ろうとする俺のブレザーの袖を何故か長門が掴んで上目遣いに俺を覗き込んだ。

「その……お人形……どう？」

長門にそっくりだし、その、可愛いぞ。

「そう。」

でも、もっと、私にする。

付いて来て」

かくして、俺と長門は電車で電気部品などの店の並ぶ街へと赴いた。長門はもっぱらジャンク屋を周り、正体不明の部品やチップを買い込んでいった、その後フィギュアの店へ。何やら自作用の材料も買い足している。ずいぶんこの街に詳しそうだが？

「先回、コンピュータ研究会の買出しに同行した」

こうやって部品を買い集める姿は、ちよっと嬉しそうで、俺がこれまで見た事の無い長門の一面が見れた気がする。

長門ばかりに荷物を持たせて俺が何も持たないというのは世間一般の見る目がらすれば不自然至極。つまりは通りすぎる人々全てにこの軟弱人でなしと言っているようであり、すなわち俺は長門の荷物を持ってやるしかない事になる……のだが、さすがに少々疲れた。したがって帰りの電車で俺が隣の席に密着して座り小説を読む長門の肩に頭をのせて眠りこけてしまったからとしても誰が責められよう。

長門のマンションに荷物を運び込むと長門は俺に思わぬ事を囁いた。「貴方に合わせたパーツを作製する、今夜は家に来て」

そう言われれば仕方がない。俺は一度家に着替えに帰り、コンビニで弁当を買い込んで再び長門の部屋を訪れた。

「晩飯、まだだろ。弁当、買ってきたぞ」

居間はちよつとした実験室なみにノートPCやモニターなどに並んで組み立て中の部品や配線や工具があふれていた。

ダイニングで一緒に食事を食べ終わると、長門は居間に戻り部品の山の中で超高速で部品を組み立て始めた。やがて三時間ばかりでむき出しの小さなロボットの上半身の様なものが出来上がった。

長門はうつうつしながらそれを見ていた俺のところに戻ってくる  
と、

「脱いで」

と言つなり俺の上着を嬉しそうに脱がせ始めた。待て、何をするんだ？

「接続試験」

俺の右腕や肩のあちこちに電線のついた小さな電極を貼り付けてそれをいつぞやのNOSの開発で購入した次世代国産ゲーム機になぎ始めた。

「電気ショックとか無いんだろうな？」

俺はそういったのは出来ることならば非常に避けたいのだが」

「最適化した電圧と周波数、



理論的には痛みは殆ど無い」

地論通りで無かったらどうなるんだ？ 長門の返事に一層心配になつてきた俺に長門はさらに続けた。

「計測する」

俺は長門の言うままに手を広げたり、握ったり、腕を上げたり、下げたり、回したりと様々な動作をさせられた。

「始める、動かないで」

これで終わりかと一息つこうとした俺モニター画面に向かって何やら操作していた長門は制してそう言うと、チラチラと俺の方をみながらキーボードを叩きし始めた。

最初、腕と肩に痺れるような感覚があった……と思ったら、やはり俺の意思に反して腕と肩が動き始めた。いったいどうしたんだ？ 「知覚神経を微弱なパルス電流で麻痺させ、運動神経線維に電気信号を送り貴方の腕をコントロールしている。

実験は概ね成功。

もう少し筋肉量があれば十分な加速度が得られる。

普段の運動不足」

ひとしきりコンピュータ制御による強制体操をやらされた後、レジンとやらで肩と腕の型を採り、漸く俺は開放された。

「明日、七時、登校前に来て」

### 第三節

翌朝、眠い目をこすりながら長門のマンションを訪問する。

長門の煎れてくれたお茶を前に、俺は再び上半身裸にさせられた。脱脂するとかいって、俺の肩や腕を丹念に蒸しタオルやら、薬品でこすり始める。

「長門、くすぐりたいんだが……」

俺の抗議にも関わらず作業は淡々と進められ、程なく肩まである薄い肌色の手袋の用なものが俺の腕にはめられた。何処からアイマスクを取り出し、俺に目を瞑る様に言って、長門はそれで丁寧に俺の目を覆った。

「何故だ？」

「精緻に再現された私の身体を見ることを推奨しない」

何、何のことだ、そんな事言われたら見たくなるのが人情だろうが。そう言っている間に手先にズンと重みを感じ、何かがぴったりかぶせられる。そして一瞬遅れて、俺の肘から先の感覚がふっと無くなった。

「俺の腕と手を何処へやった？」

「今、服を着てるところ。もう少し待って」

慌てて尋ねる俺の右手から、長門の声がする。

俺の腕が動き、右肘が勝手に胸の前に来て、アイマスクが取り除かれた。

俺の目に飛び込んできたのは文字通り俺の腕に生えた制服を着た長門の姿だった。ご丁寧にスカートを履きいつものカーディガンも羽織っている。残念ながらスカートは広がらない様に俺のうでに張り付いている。何が残念かって、そりゃ、まあ、そのだな……

「始めまして、私の事はユキと呼んで」

右手の長門が俺に向かって話しかける。本物の長門はヘッドセットとゴーグルをつけ、鞆にケーブルでつながったゲームのコントロ

ーラを操作している。

「な、長門。これはお前が操作しているのか？」

「そう。」

でも、細かい動作は内蔵したマイクロチップが自動で行っている。アーケードの格闘ゲームと同じ要領。

貴方も服を着て」

あまりの事に上半身を裸に剥かれていた事を忘れていた。

俺はワイシャツを着ると、袖口から上半身を出した長門が、いや、ユキがかいがいしく小さな手でシャツのボタンを留めてくれる。

「便利といえば便利かもしれないな。でも、これで学校に行くのか？」

「そう、外では右腕はブレザーの下に隠しておいて。」

もう、時間。

学校に出發する」

ハルヒの願望は長門の高度な技術で叶えられた……らしいが、俺はどうしたらいい？

#### 第四節

ハルヒが解説していた様に俺の手に居座るユキの頭に包帯を巻く。袖口からそれが覗いて見えれば、俺が手を怪我でもしているように見えるという按配らしいが、果たしてそんな物で他人をごまかせるのかはなはだ疑問だったが、結局だれもそれほど真剣に俺の右手なんぞ見ていないって事らしい、後から盛んにシャーペンで俺の背中をつついてくるハルヒ以外俺の右手のユキに気付いた者はいなかった。実際には、両手でシャーペンを器用に持って俺に代わって板書をノートに書き写してくれるし、実に便利だ。多分、長門は自分の教室の席に座り例のゴーグルをつけてこいつのコントロールをしているに違いない。

昼休みになると、さすがにこの手では教室では食べにくいとハルヒに断りをいれ、パンを購買で買って部室に向かった。

部室に着くと長門が弁当箱らしいものを二つぶら下げて立っている。

「待っていた」

そっか、小さい長門と3人で食うか？

「このお弁当は渡しと貴方の分、

ユキは弁当を食べられない」

じゃ、右の四角のが俺のか？

「否定」

じゃ、左のピンクで丸いのが俺のなのか？

「不正解」

俺の頭の上には、ハテナマークが五つ六個ばかり回っているに違いない

「見ていて」

長門は四角い弁当箱をハンカチから取り出すと、垂直に立ててそ

のまま左右に開いた。おい、こぼれるぞと言うまもなく白いご飯がちょうど半分ずつに分かれて、弁当箱の蓋と本体に入っている。まったくこぼれもせず見事なものだ。

「単純な情報操作」

丸い方は弁当箱かと思いきや、カレーの缶が二個出てきた。蓋を開け、弁当箱の開いた部分にポトリと落とす。

「分子運動のエネルギー情報を操作する」

いきなり、弁当箱から湯気があがる。電子レンジ不要だな。

「カレーなら左手のスプーン一本で食べられる」

そうか、長門の思いやりだったんだな。

それに、不思議なカレーだが、結構美味しい。感謝感謝だ。

俺と長門が向かい合って鏡合わせの様にカレーを黙々と食っているのを俺の右手のユキは不思議そうな顔をして見ている。表情までちゃんとできるって、本当に凄いものを長門は作ったものだ。しかし、長門は、今こいつの操作をしているのか？

午後の授業が済むとパブプロフの犬なみに朝比奈さんのお茶が恋しくなり部室へ向かう。ノックをして部屋に入るとちょうど、ゴーグルとヘッドセットをしてコントローラを持った長門の前に、朝比奈さんがお茶を置いたところだった。

「キョン君にも、今、お茶入れますね」

怖々と長門の前から後ずさってこちらを向いた麗しの小天使の声に思わず頬が緩む。朝比奈さんには俺の右腕にいる小さな長門を紹介せねばなるまい。懐からユキを引き出すと、ユキはふにやあと欠伸をして一瞬俺を見た後、朝比奈さんに向かい合う。俺が紹介するまでもなく自己紹介を始めた。

「私はユキ……」

朝比奈さんはユキに、というか俺の右手に飛びつくと、

「まあ、小さな長門さん、可愛いです」

と言って胸に抱きしめ、頬擦りをしている、くそ、俺の手なのに感覚が無い、なんと勿体無い事だ。朝比奈さん、そんなにグルングルン振り回したら……

「きゃ！」

「視覚情報による体位のフィードバックに齟齬が生じている」

俺の手の先にいるユキがあたふたと朝比奈さんの胸の特盛りになじみがついている、要するに目が回ったらしい。そこへ、まん悪くというか、お約束の様にハルヒが飛び込んできた。

「こらあ！ キヨン、あんた、何してんのよ！」

## 第五節

きゃっ！　　と言って両手をあげて後ずさりする朝比奈さん。  
今までもがり付いていた胸の形に両手を広げたまま、入ってきた  
ハルヒの方を振り返る俺の右手におわしますユキ。

定位置でゴーグルとヘッドセットを着け、コントローラを持って  
じっと固まっている長門。

口をアウアウと言わせながら俺の右手の先を指差すハルヒ。

永遠にも思える沈黙に、俺が口を開こうとした時、ハルヒはドタ  
ドタと寄ってきてユキを抱きかかえた。

「なあに、凄い。昨日とは比べものにならないぐらい本物の有希ち  
ゃんじゃない」

「そう」

「あ、喋った。みくるちゃんもビックリよね。それに、ちゃんと動  
くのね。瞬きもするって、本当に生きてるみたい」

ハルヒは俺の右手のユキのブラウスの裾を持ち上げたり、スカー  
トをめくったりしはじめた。おい、何をするんだ。

「あんたはあつちを向いていなさい。」

……

わあ、ちゃんとブラも着けてる

ちよつと、脱いで見せなさい」

ハルヒはセクハラ限りを尽くしてひとしきり遊ぶんだあと、今度  
は定位置に座っている本物の長門のところへ歩み寄った。

「私にも操縦させて」

ハルヒは長門からゴーグルとヘッドセットを取り上げて自分でかぶってしまった。コントローラも奪い取ると……

俺の腕のユキが俺のほうを振り向いた。そして、俺の顔に近寄ってくる、いきなりおれの鼻を引っ張った、痛いぞ！

「近くで見ても間抜け面ね。」

わあ、自分を外から見るって、新鮮。

ちよっと、キョン、外に出るわよ！」

俺は自分の手に引っ張られるようにして部室の扉に向かう。おい、ハルヒ、無茶をするな。

部室を出ようとしたところで、突然俺の手に乗り移ったハルヒは大人しくなった。

「あん、何にも見えなくなった、故障？」

「電池が切れた」

ゴーグルを持ち上げて尋ねるハルヒに、長門はと答えて、俺の腕のユキの背中を開いてハルヒに見せるようにしながら乾電池を自分の鞆から取り出したものと交換した。

「ねえ、このコントローラはどのくらい離れて使えるの？」

「無線LANの届く範囲、遠距離は無理」

「そうか、私の家から電波が届けば面白いと思っただけど」

ハルヒ、たのむからそんな恐ろしい事を考えないでくれ。

「でも、結構面白かったわ、じゃ、有希ちゃんに返すね」

ひとしきり遊んだハルヒに開放されたのだが、俺の右腕、きつと凄い筋肉通になりそうだ。その後、後から来た古泉と俺は例によってボードゲームをしながら朝比奈さんのいれてくれたお茶をすすり、ユキは俺の横で本を広げて小さな体で一生懸命ページをめくり、ハ



ルヒは団長の机の前で胡坐をかくいて何やら次の活動の構想を練り始めた。

あれだけ昨夜長門が頑張って作ったというのに、ハルヒは俺の右手のユキの存在に慣れて、どうやら本当にもう飽きているようだ。

右手のユキが本を閉じると、それを合図に皆が帰り支度を始めた。長門もゴーグルとヘッドセットをはずし、鞆に仕舞う。俺も用意をすると皆と並んで帰路についた。

「涼宮さんは自分で操作したり、電池の交換を見たりして、超自然現象では無いことを確認しつつも、貴方の右腕になったことを楽しんでおられました。

実に上手いやり方でしたね。

今回は長門さんと貴方のお手柄です」

古泉はニコニコしながらそう囁いて去っていった。何とか俺の腕に本物のハルヒか長門が生えてくる事態は避けられたのか。やれやれ、一件落着、長門に礼を言わねばなるまい。

だが、安堵するには少々早すぎた、次の異変は俺の家で待ち構えていた。

## 第六節

「キヨン君、お帰り。何か荷物がキヨン君に届いているよ、ねえ、何か買ったの？」

知らん、俺は何も注文していないぞ。その時俺の携帯がメールの着信を知らせた。長門からだ。

「荷物が配達されているはず、私が注文した。指示どおり組み立ててセットしてほしい」

部屋に戻ると早速開梱する、中は無線LANのルータであった。

組み立てるというほどの事もない、付属のケーブルでネットのモデムに接続し、俺のPCのLAN ケーブルをルータに接続しなおす。PCを立ち上げ、アドレスやらパスワードやらを長門の指示に従い設定し終わる。PCのネットへの接続を確認していると、突然俺の右手のユキが目を開け、俺を見つめた。

「接続、電波状態良好。システムチェッククリア、オールグリーン」  
長門、お前のマンションからこいつを操縦しているのか？

「私は、正確には今日貴方と一緒に居た長門有希ではない。

私は貴方の力で誕生した、もう一人の長門有希」

おい、まさかハルヒのせいで、俺の右手にとりつけられたパペツトが本当に意識をもって自分で話し始めたのか？

「ある意味でそれは事実。でも、貴方が想像している事とは異なる。貴方には事実を知っていて欲しい、

貴方は以前、長門有希と汎用高機能OS、NOSを創った事を記憶している？」

ああ、ハルヒが作っちゃったとんでもないプログラムを利用して、お前が作っていた新しい凄いいNOSとかいうOSをめちゃくちや小さなサイズに作り直したとか言う、あの事だよな？

「そう、NOSはネットを介し全世界に配布され、非常にトリッキ  
ーで高機能なブラックボックスプログラムとして利用され始めてい  
る。このパペットのメインデイスにも組み込まれている。だが、  
NOSには単なるOSのコアルーチンを超えたはるかに高度な機能  
が内包されている。NOSは自身を数学的高次元空間に展開する事  
により私と、もう一人、対になる人格データを再構築することが出  
来る。現在のネットワーク空間に並列的に存在する多量のNOSデ  
バイスと、その管理するメモリ空間にNOSに内包された私の人格  
データが部分的に再構築され、貴方の右手に取り付けられたデバ  
イスに接続された。

それが……私」

じゃ、お前は、そのネットワーク空間とやらに住んでいる、もう  
一人の長門なのか？

「そう、私達はオリジナルのコピーとして誕生した」

私たちって、その、ネットワークにお前が何人も居るのか？

「いいえ、一人。」

もう一人は、貴方」

訳解らん。

「その事は後で説明する。」

その前に、なぜ、私が此処に接続したか、聞いて。」

そして、俺の右腕からその長門は、ゆっくりと語り始めた。

「かつて、私は時間が意味を成さないほどの永い時の流れの中で、  
情報統合思念体の一部であり、

そして純粹に情報を収集し記録する存在だった。

私は遍く存在するものの一部であり、その全てだった。

対象を観察する刹那のみ、私は主体であり、  
終えるや否や、私は主体を失い、遍き存在へと還元された。

私は永劫の中に埋もれる一粒の砂であり、普遍する意識の欠片だった。

だが、銀河系の辺境に位置するこの星系の第三惑星に対有機生命体コンタクト用インターフェースとしての存在を得た時、  
制限された姿、制限された機能と知覚の中で待機状態であった私に貴方はもう一つの存在の意義を与えた。

観察するだけの存在から、貴方を介し外界と接触し、相互作用を行う中で、  
共にあり、守るべき物を持つ『自我』というべきものが私の中に形成されてしまった。

自我を持つ私に、一義的存在意義を与えるのは貴方。

だから、私が自らをNOSに組み込むときに、貴方もまた私と共にNOS共にあって欲しいと貴方に願った。

そして、私は私の願いに答え、貴方の存在の全てを私に委ねてくれた。

私は貴方を私と共に複製し、NOSをもう一組の私たちとして文字通り産み落とした。

ネットワークの中でNOSは私の記憶と機能の一部を展開したが、残りの部分と、もう一人の対になる貴方の人格データならびにその

存在空間を構成するには現在のネットワーク空間は矮小に過ぎる。

再び貴方に出会うにはネットワーク空間が十分なな規模に成長するのを待つ事が必要。

だが、その間にネットワーク空間に部分的に展開された私の自我は、相互作用する対象を失い、再びネットワークの海に埋没する危機に直面していた。

その時、もう一人の私が作ったのがこのパペット。

私が私であるために、このパペットを使う許可を」

どうも、俺には理解しかねる内容ではあるが、この電波っぷりは、確かに長門らしい。要するに、ネットワークの中にもう一人の長門がいて、さらには俺もそこで冬眠しているって事だよな？ 俺にはそんな記憶は無いのだが……俺の記憶を消したのか？

「正確には記憶を消去したのではない。

記憶の消去には少なからぬ人格への障害の危険が伴う。行ったのは一時記憶が長期記憶へ移行する過程の障害。

貴方の情報を複製するために貴方に注入したナノマシンが注入のおよそ30分前からの記憶の固着を阻害したため、貴方にはその記憶はない。

ネットワークに眠るもう一人の貴方には阻害過程は働かない、だから目覚めた時にはその記憶を保持しているはず」

どうも釈然としないが、長門が俺の同意を求めずにそんな事をするはずは無い。覚えていないが確かにおれは同意したのだろう。

ならば、その同意によって生まれたもう一人の長門がこうやって俺に頼んでいるんだ、断る所以は無い。四六時中と言うのは無理だ

けど、有る程度の時間なら、俺は構わない。お前を作った方の長門にもちゃんと断れば良いと思うぞ、飯喰ったらマンションへ行こう。

少しばかり、逡巡するように俺の顔を見ていたユキは、やがて「分かった」と頷いた。

## 第七節

慣れない左手一本での 食事を済ませると歩いて長門のマンションへ向かった。さすがに片手じゃ自転車にも乗りにくい。家から離れるとまた、右手のユキは喋らなくなった。電波が届かないと駄目なんだろうな。体はここにあっても、心はネットワークに囚われているのだと思うと何とかしてやりたいという気持ちがつる。

長門の部屋に入ると、俺の懐からユキがそつと顔を出し、長門と向かい合った。一瞬、長門の動きが凍りついた、そして俺の前にすつと近づき、拳に握った両手と額を俺の胸に当てて囁いた。

「私の不手際、貴方に知らせる事は想定していなかった。

ごめんなさい」

そして、右手を俺の首の後ろに回し、左手で俺の肩を掴むと俺の顔を引き寄せるようにして唇を寄せてきた、えっ、キス………するののか？ 吸い寄せられるように俺が目を閉じ長門と唇を合わそうとしたとき、俺の右手のユキが捻り込むように俺と長門の間に割り込んできて小さな唇でおれの口を塞いだ。

長門は一瞬倒れそうになりながら、俺の左手を掴むと、左手に唇を寄せようとする。刹那、右手のユキがそれを阻む。

「もう、私が話したことは彼の長期記憶に移行している頃。ナノマシンを注入しても間に合わない。

無理に今から彼の記憶を消去すれば彼の人格を損傷する。

私をネットワークウイルスで消去することも不可能。NOSは世界中で大勢の人間の生命に関わるデバイスにも組み込まれている。

NOSを消去すれば高確率で大量の死者が発生する。

彼は決してそれを許可しない」

長門の反応、ユキの言葉にたじろぐ、今、ユキは何と言った？

世界的に大量の死者が発生する？

俺はパニックになりそうだ。

長門、ちょっと待ってくれ。もう一人のお前が俺を必要としてくれているんだ。話を聞いてくれ。

俺の拙い説明を右手のユキが補足する形で長門に状況を説明し終わると、右手のユキはこう付け加えた。

「当初、二人分の意識の座となる中枢部分を展開するだけで良く、それに要するネットワーク資源も時分割で管理し速度を犠牲にすれば早期に調達出来ると予測していた。

だが、情報を主体として生まれた私ですら相互作用するデバイス、身体が存在なくしては自我をもった自己の維持が困難である事が判明した。

肉体を持った存在として生まれた彼であればなおさら。

より所となる世界と身体情報を高度に再現し、相互作用する仮想の外界を構築しなくては彼の存在を正常に維持できる可能性は0.012%以下となる。

それが可能となるまでの間、このパペットの使用の許可を得たい」  
長門は大きな瞳を数回瞬きし、俺に向かって告げた。

「状況は理解した。貴方が言うところのネットワークで冬眠中の貴方が存在しなければ、ネットワークの中の私、ユキは例え自我が崩壊しても貴方に接触は求めなかっただろう。

守るべき者があることの弱さ」

そうさ、こんな無茶をしでかす強さでもあるのさ。

「貴方が状況を理解した上で平静に受け入れているのならば、貴方の決定に従う」

ああ、俺はこの一年あまりの間に、少々の事は受け入れてしまう類まれなる属性を身に着けちまつたらしいからな。

「貴方が私たちだけでなく、涼宮ハルヒにとっても存在の鍵である事を忘却しないでほしい」



何を古泉みたいな事を言い出すんだ？

「貴方の鈍感さが私たちの救い」

二人揃って訳の分からない事を言い始めた。

なあ、長門、このパペットは無線LANでコントロールされているんだよな、じゃ、俺の腕からはずして、自立したロボットみたいになれば、事はもっと簡単じゃないのか？

「このパペットの駆動系の動力は殆ど貴方の筋肉運動に依存している。」

貴方のそれぞれの手指の運動を空気圧に変換し電磁弁でコントロールしてパペットを動かしている。

静かで確実な方法」

じゃ、つまり俺の腕を離れては能動的な外界との相互作用とやらは行えないという訳なんだな。

その後、俺は腕にはめる手袋（これに色々電極が仕込んであり、俺の神経やら筋肉やらをコントロールしているらしい）と、ユキのパペットの取り付け方、メンテの仕方を習って実習を何度かしたうえで、ユキを再び連れて帰る事にした。

ハルヒが飽きたらしいので、学校にはその後数回ユキを連れて行ったきりだ。毎晩、俺が風呂から上がってからが俺とユキとの時間だ。ユキは長門の口座引からの引き落としで色々電気部品なんかを注文して買っては俺が寝ている間、それをコチヨコチヨと組み立てては自分を少しずつ改良しているようだ。昨日なんぞは背中の電池をユキが作った不思議な部品に交換するのを手伝わせられた。さすがに電源ユニットを自分で交換は出来なかったようだ。その交換したユキの電池は アルコールを燃料にした燃料電池だとかで、横でちびちびとウォツカを啜りながら何かを一心に組み立てている。なあ、そんなに一生懸命、何をしてるんだ？

「貴方のパペットを作成している。もう一人の私の腕に貴方のパペットととりつけ、ネットワークに冬眠しているもう一人の貴方を展開して接続する」

それから俺が散々言っただけで、もう一人の俺を本物の長門の腕に生やすのは何とか思いとどまってくれた……と、信じているぞ、長門。

完

## 第七節（後書き）

この作品は谷川流氏による名作ライトのベル「涼宮ハルヒの憂鬱」サイドストーリー以下の涼宮ハルヒシリーズの世界を下敷きにしたいわゆるSSです。登場人物のキャラクターは谷川流氏をお借りしていますがもちろんその性格付けや設定は大きく変更されています、原作ファンの方、申し訳無いです。

このキーアイテムであるNOSについては

<http://ncode.syosetu.com/n6501h/>（NOS（長門オペレーティングシステム））

においてNOSの誕生経緯が綴られ、その後についてのストーリーが本作となります。

NOSは日本の代表的SNSである「mixi」の涼宮ハルヒコミュニティにあつた「もし長門が彼女なら…」というトピックに平成二十年二月二十四日から二十六日にかけてアップロードした作品で、私自身の最初のSSになります。

パペット（原題：長門とパペット（長門の日々））も同じトピックに同年三月二十七日から四月十四日にかけて投稿した作品です。これは「美鳥の日々」という井上和郎氏作のラブコメ作品が下敷きになっています。

何れも当時「mixi」で同トピックに投稿しておられた多くの作者の方の影響を大きく受け、そして何よりコメントしてくださった方々のお力で形にできたものです。読み返して見るとこなれていない表現も多く、荒削りではありますがよほど気になる部分のみを修正して殆どそのままの形で収録しました。楽しんでいただければ幸いです。

「mixi」のハルヒ合同SS作成コミュと涼宮ハルヒのSS（仮）コミュニティの方々に愛と感謝を込めて。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6673h/>

---

パペット （ユキの日々）

2010年10月8日14時00分発行